

不良債券よりも良質文化を

「文化庁の抜穴」というコラム名を見て、「ハハーン」と思う人は、相当に年輩の方であろう。アンドレ・ジッドの同名の小説は、私たちの若い頃によく読まれたもので、法王庁をめぐって、とんでもない詐欺師の活躍する面白い作品である。まったく思いがけず、法王庁ならぬ文化庁の長官に就任することになった。何だか抜穴から入りこんだような感じである。長官になってまず感じたことは、日本は伝統文化にしる、外国か

文化庁の抜穴

河合隼雄

ら取り入れた文化にしる、実に質が高く、豊かなものをもっている、ということである。ところが、新聞を見ると「不良債券」を中心に、暗い話題ばかりで、何だか日本中が沈みこんでいるようである。ここでもっと「良質文化」についてPRをし、日本を明るくする努力をすることが、長官としての私のひとつの役割と考えている。皆さんの援助を得て頑張りたいものである。

感動した話

文化庁の抜穴 河合隼雄

文化庁長官になったために、コンサートや演劇などを楽しめる機会が多くなって嬉しい。先日は川島成道さんのヴァイオリン・コンサートに行ったが、このときは小泉純一郎総理と一緒であった。八歳のときの失明の苦しみを克服、世界的なヴァイオリニストになった川島さんの演奏は、名演につぐ名演で心に響く体験をしたが、今回ここに述べたい感動は、それとは異なることである。

聴衆の拍手に応えての挨拶で、川島さんは微笑

しながら、「皆さんの期待に応え、これからも『感動した!』と言われる演奏をしたい」と言った。明らかに総理の口癖をまねてのジョークに満員の聴衆は爆笑。総理も大笑いしながら立ち上がって手を振った。

昔は、クラシック音楽というと肩をいからせて聴いたものだが、日本でもこのような楽しい雰囲気のあるコンサートが開けるようになったことに、私は感動したのである。

日韓文化交流

今年は「日韓国民交流年」ということで、お互いの文化交流行事がいろいろとあつて嬉しい。五月八日には日韓の「宮廷音楽」の演奏会があつた。これはまったくはじめての試みで興味深かったが、日本の方が地味な感じがするのに対して、韓国の方は、はっとするような華やかさがある。同席していた韓国の文化院長の金鍾文さんは、これは日本の方が古式を守っているからですと言われる。そう言われると納得するほどと思う。

五月二三日は、ソウルで行われた「日本古美術

文化庁の抜穴 河合隼雄

展」の開会式に参加、何しろ国宝一七件、重要文化財七二件、全体で一八九件という豪華なもので、韓国の人たちにも大いに喜んでいただいた。式後、韓国の美術館を見学したが、両国の作品は、よく似ていて、また異なるところがあり、興味が沸いてくる。そこで、日韓の同時代の美術工芸品を一堂に展示するような展覧会を開けないものだろうかと思つた。韓国の方は、それは面白そうでやってみたいと言つておられたが。

日本ウソツキクラブ

真偽のほどは別として、私が「日本ウソツキクラブ会長」の肩書きをもつことは、大分有名なようである。

先日、東京国立博物館の特別展「日本美術の流れ」の開催式に参列。参加者は文化ボランティア、外国の外交官、マスメディアの人など、何となく柔らかく楽しい雰囲気なのを見てとって、野崎弘館長は私を「文化庁長官兼、日本ウソツキクラブ会長」として紹介され、笑いが起こる。

ところが、「ウソ」は欧米では「悪」で冗談の

文化庁の抜穴 河合隼雄

種にもならない。英訳はどうされるか心配になる。

ところで、通訳は文化ボランティアのMM国際交流協会の村松増美氏。かねがね日本人にはユーモアが必要と主張されている愉快な方で、っこりとして「日本ジェスターズ」(jesters)「冗談を言う人」の意)クラブ」と訳される。おかげで、外国人の楽しそうな笑いに包まれて、私も挨拶ができた。さすがは村松さん。お礼にウソツキクラブ名誉会員に推薦したいと思った。

乙女たちの踊り

六月の末に熊本市で行われた文化芸術懇談会に参加。アトラクションの牛深高等学校郷土芸能部によるハイヤ踊りには、ほんとうに心を動かされた。

総勢三〇名ほどの女子高生が、踊り、三味線、太鼓、歌などを受け持ち、文字どおり一糸乱れぬ、生き生きとした踊りを見せる。彼女たちの顔は笑顔で輝き、心からの歓びを感じさせる。

実はその前日、私は新国立劇場で、バレエ「ジゼル」を見た。そこにも乙女たちの踊りがあった

文化庁の抜穴 河合隼雄

た。第二幕のウイリ（婚礼前に死んだ乙女たちの亡霊）の踊り。このイメージが心に残っていたので、ハイヤ踊りがすごく鮮烈に感じられた。アマとプロ、生と死、色彩と白色、日本と西洋、そこにはいろいろな対比がある。しかし、どちらにも、日本の乙女たちのもつ豊かな表現力が感じられる。

日本はこのように異なる芸術を楽しめるし、乙女たちは豊かなエネルギーと表現力を感じさせるし、日本人であることの有り難さを思った。

素晴らしい高校生

横浜で行われた全国高等学校総合文化祭の開催式に出席。国際性を持たせようと諸外国からの参加もあり、なかなか多彩で、よく考えた式典である。印象的なことは、これらの運営をすべて高校生が行っていることだ。もちろん、先生方の協力もある。皆の前に立って挨拶をする前に、先生の前でお辞儀の練習をしている女子高生が居て、ほほえましかった。手話通訳をする高校生たちも、真剣な表情で、舞台の袖で練習している。

これらは、「一七歳」などと言って、日本の高校

文化庁の抜穴 河合隼雄

生の大半が異常なようなイメージを植えつけるマス・メディアからの印象とは、まったく逆の姿である。それに、一七歳の殺人は新聞に大きく出ることが、この文化祭で活躍している素晴らしい高校生のことには、まったく記事にならない。なぜ、音楽、演劇、舞踊は報道されず、野球だけが出てくるのか。思ってもはじまらない。このような文化活動の素晴らしさをPRするのは、文化庁の仕事のひとつと心得て頑張らねば、と思った。

中国に出張した機会に、兵馬備を見ること
できた。等身大の軍団が黙々と立ち列ぶ威容は、
息を呑むような感動を呼ぶものがあった。秦の
始皇帝の墓のこれはごく一部と言ってよく、そ
の全容が顕れてくると、どれほどのものか想像
を絶する広大なものだろう。

エジプトでピラミッドを見たときにも感じた
ことだが、これらの古代の文明にあつて、人間
が「死」をいかに受けとめようかと苦心して、
このような後世を感嘆させる文化遺産を残すこ

文化と死

文化庁の抜穴 河合隼雄

とになったと思う。

ひるがえって現代文明をみると、死の方はな
るべく触れぬことにして、いかに生きるかとい
う方に、あらゆる努力を傾けているように思う。
もちろん現代文明が過去のそれよりも、はるか
に「進歩」しているのは当然だが、何だか深さ
に欠ける感じがするが、どうだろう。やはり古
代の人々の信じたように、生きている間はごく
短く、死後の生の方がはるかに長いというた
めだろうか。

博物館内のコンサート

奈良国立博物館で行われた「バロック音楽の夕べ」を聴きに行った。私は欧米に留学して、博物館や美術館内の室内楽のコンサートを聴いて、羨ましくてたまらなかった。当時、日本ではどこでもそんな試みはまったくなかったので、美術品や絵画に囲まれ、音響効果の素晴らしい部屋で室内楽を聴くと、これぞまさに音楽！という感じがしたのだった。至福の時という感じがした。

こんなことを日本でもやれたらいいのにと願

文化庁の抜穴 河合隼雄

つていたので、奈良博の催しには大喜びで出かけていった。仏像に囲まれ、バロック音楽を聴く。不思議なことにキリスト教国で作られた宗教的な音楽が、結構うまく調和するのだ。コレギウム・ムジクム・テレマンの演奏も心のこもった、親しみを感じさせる名演奏だった。

こんな試みが日本中に広がるといいと願っている。東京国立博物館も同様のコンサートを企画中とか、大いに期待している。是非とも多くの方に来ていただきたい。

美術品をもつと世の人に

日展に行った。作品からの強いインパクトを受けて、身がひきしまるような思いがする。院展のときにも思ったことだが、これだけの素晴らしい傑作が、展覧会が終わると、人目に触れる機会がほとんどなくなるのは、まことに残念である。これに対する何かよい方策はないものだろうか。

例えば、公共の施設でこれらの美術品を飾りたい希望をもつところを探す。そして一方、自作を一年間とか一定期間貸与してもいいと

文化庁の抜穴 河合隼雄

いう作者には登録をしていただく。それらをうまくマッチングして、これらの傑作を公共施設に展示すると、一般の人々は大いに喜ぶことだろう。

と言っても、破損の場合のための保険料が必要だろう。運搬費用はどうするのか。これらをどうするかを考えつつ、実現に向けて努力するボランティア活動、あるいはNPOを立ちあげてできないだろうか。何とか是非実現して欲しいと願っている。

ボランティアの心意気

以前からの関係で、社会福祉の人たちもおつき合いが深い。文化ボランティアの話をしていると、全国社会福祉協議会の方から次のような話を聞かせていただいた。

最近、身体障害者の人たちのスポーツ大会がよく行われ嬉しいのだが、悩みは観客が少ないことである。そこで、ある団体が観客の方にはお弁当を出しますという計画をしたが、やはり人が集まらない。

そこで、身体障害者のスポーツ大会をする

文化庁の抜穴

河合隼雄

ので、運営の補助に一人一〇〇〇円を出していただき、競技も観ていただきたいと企画すると応募者が多く満員になったとのこと。

「ボランティアの人たちの心意気を大切にしないではいけません」と言われたが、これには私も感心してしまった。「お弁当」などでは動かない。何かほかの人に喜んでもらうことをやってください！ という呼びかけに人々は応じてくるのだ。これは文化ボランティアの場合も同じだろう。心すべきことである。

大日文化如来

文化庁の抜穴 河合隼雄

華嚴経の中心は大日如来である。大日如来がた
くさんの菩薩を従えて説法がはじまる。ところが、
華嚴経をいくら読みすすんでも、大日如来
は無言のまま。周りにいる菩薩が大日如来の考え
を推しはかって、いろいろと教えを説くのである。
文化庁長官も、真似をして終止無言でいてはと
思ったが、如来さまをそのまま真似るのは恐れお
おいので少しだけ真似てみた。

文化庁の年頭の挨拶。長官として、みなさんに
五つの大切なことを言いたいと前置き。

まず第一に、文化庁の予算が一〇〇億円をこ
えて非常に嬉しい。皆も喜んでいますが、これはす
べて国民の税金であることを忘れないように。そ
して、少し間をおいて「二番から五番までは皆さ
んでお考え下さい」ということで、無言で終わる
ことにした。

この結果、菩薩ならぬ文化庁の幹部が、『大日文
化如来』の意を体して部下とともに頑張ってくれ
ると信じている。これからの一年が楽しみである。

『白鳥の湖』の思い出

松山バレエ団の『白鳥の湖』を観た。森下洋子さんの至芸の踊り、豪華極まりない舞台などに感激しつつ、昔のことを思い出した。

私が高校の教師だったころ、生徒たちと人形劇団を結成。影絵もした。影絵に『白鳥の湖』を選び、早速、試作して、「カッコイイ」と喜んだものの、ふと気がつく、「白鳥」は影絵だからすべて「黒鳥」なのだ。では、ほんとうの「黒鳥」をどうすればいいのか。

影絵なので悲劇の方がふさわしいと、もと

文化庁の抜穴 河合隼雄

もとの伝説どおりに悲劇にしたのだが、チャイコフスキーの音楽を使うと、バレエの物語はハッピーエンドだ。では音楽はどうするか。皆さんならこれをどう解決しますか。

ところで、松山バレエ団では終幕に、モーツァルトの『アベ・ヴェルム・コルプス』を使い、実に印象的な演出を行っていた。こんな手があったのかなどと思いつつ、私は往時このことを思い出していた。

旧知との再会

先日、「文化芸術懇談会」を大阪で開催したとき、その会場として、社団法人日本綿業会館が選ばれた。

どっしりとした建物で、入ってみると、イタルネッサンス調でまとめられた玄関ホールをはじめ、すべての調度品など重厚で落ち着いた雰囲気ですばらしい。大阪は大空襲に襲われたのにどうして、と思っていると、これは特別な建物で、耐火ガラスなど使用していたため、空襲の際、奇跡的に焼け残ったのだという。

文化庁の抜穴

河合隼雄

これを知って、私は戦争で死んだとばかり思っていた肉親に再会したように感じ、何ともいえず懐かしく感じた。大阪の大空襲の恐ろしさを知る人は、参加者の中でも少ないのではなからうか。私は文字どおりの焼野原と化した、大阪の姿を見て——親戚の家も何もなかった——涙したことを今もよく覚えている。

日本のこれからの文化芸術の振興を考える会場に、ここを選んでくださった大阪府の方の配慮に感謝したい。

先日、文化財の保存と活用について、韓国と交流、協調をしてゆこうと、韓国の文化財庁に調印のために出かけてきた。

その後で、百済時代の遺跡などに案内していただいたが、ある村で食事をしたときに、実はここは川辺の港のあったところで、日本が百済と交流があった時代は、日本の舟がここまで来たのだと言われる。感心して聴いていると、この村は、昔は「くづれ」と呼ばれていて、その名がなまって、「くだ

「くだら」の由縁

文化庁の抜穴 河合隼雄

ら」の国と日本人が呼ぶようになったとのこと。これは、まったく驚きだった。

「百済」をどうして「くだら」と呼ぶのだろうなどと、文化庁の人たちと話をしていたので、これで疑問が氷解したわけであるが、あんがい日本の人たちは知らないのではないかと、ここに紹介した次第。そんなことは、ほとんどの人が知っている。今更「くだらない」ことを言うな、と言われるかも知れないが。

一〇一歳の祝

中川牧三先生の一〇一歳の誕生祝のパーティに出席した。日本のオペラ界の草分けで交友も広い方なので、音楽界、財界、文化人が四〇〇人以上も集まって盛大な会であった。

中川牧三先生と言っても、一〇〇年もの間なので知らない人もいるだろう。大作曲家で指揮者の近衛秀麿と渡欧、日独伊三国同盟時代に、ドイツでは斎藤秀雄、イタリアでは藤原義江らと共に、音楽を学び、日本のクラシック音楽の発展につくした方である。

文化庁の抜穴 河合隼雄

上海で当時の日本軍の文化振興面を担当し、水準の高い上海交響楽団の指揮者として、まったく無名に近かった朝比奈隆を抜擢し、その後の、彼の指揮者としての成長に、大きい寄与をした。関西では、朝比奈隆を唯一、「クン」づけで呼べる人などと、中川先生のことを評していた。

一〇一歳でまだまだお元氣な姿に接し、その元氣を「関西元氣文化圏」にいたただきたいと思った。

ニューヨークの仏教美術展

日本文学を外国語に訳して出版しようという、文化庁の試みに関連する仕事で、ニューヨークを訪問した。そのときに、ジャパン・ソサイエティで講演をしたのだが、折しも、そこで開催されていた、日本と韓国の初期仏教美術の展覧会を見せていただいた。

会場に入って、左右に置かれている菩薩像を見て驚いてしまった。文字どおり瓜二つと言いたいほど似ているのだが、実はそれぞれ、日本と韓国のものなのである。このようにし

文化庁の抜穴

河合隼雄

て並べられると、その類似性が実感される。

白鳳時代の後に、奈良時代になると両者の微妙な相異が感じられることもある。よくこれだけ上手に両国から集められたものだと感じてしまう。こんな試みは初めてなので、仏教美術の専門家が遠いところからも見に訪れてくるそうだが、さもありませんと思う。

これは実にすばらしい展覧会なので、日本でもぜひいつか開催してほしいと思った。

ロシアとの文化交流

「ロシアにおける日本年」ということで、日本のさまざまな文化芸術に関する公演などがロシアで催された。私もその行事の関連でロシアを訪問。その際にロシアの文化大臣と話し合いをすることができた。

そのとき、文化大臣が、日本の村上春樹さんの作品のロシア語訳が出版され、実に広く読まれている、ということが話された。特に、若い人々の心を引きつけるとも。

帰国後、村上春樹さんと話し合う機会があつ

文化庁の抜穴 河合隼雄

た。彼はサハリンへ旅をしてきたのだが、彼によると、サハリンでは、本屋などはなく、新刊書をたくさん、背中に担いできた人が、市場でそれを広げて売っている。なにげなくのぞいてみると、彼の著書がその中に五冊もあつて驚いてしまった、とのこと。

私たちは若いころ、ドストエフスキーなどのロシア文学を読んで感激したものだが、今は、日本の作家の著作をロシアの若者が熱心に読んでいます。国際文化交流もおもしろいものだ。

関東と関西

文化庁の抜穴 河合隼雄

「関西元氣文化圏」との関連で、関西在住の新進芸術家の方々と懇談した。古典芸能や映画、舞台芸術などの各分野の若手芸術家たちだが、最初から自由でざっくばらん、実におもしろかった。取材に来たマスコミの人たちも、ずいぶんとひきつけられた感じで、本当に意義深かった。

たくさんの話題の中で印象に残ったことを一つ。古典芸能の方が、関西では舞台の幕が上がるまで、出演者や裏方のしゃべりがやまない。

関東では幕の上がるだいたい前から、一同シーン

としている、と言われたのに対して、イタリアに留学してきた方が、イタリアの舞台も関西流で、皆、幕の上がる直前まで、おしゃべりをしている、と言われた。このようなことと関連して、関西では玄人でも「よい意味でのアマチュアリズムがあるのでは」との発言も。

思わぬかたちで関東と関西、それにイタリアまで飛び火しての文化比較が行われたが、ともかく実に得るところ大の懇談会で、またやりた
いと思った。

文化力としての祭

文化で日本を元気に、ということを提唱し、大方の賛同を得ている。「文化」といってもカバーする範囲は広いが、その中の大切なものとして「祭」がある。

日常の決まり切った生活を飛び出して、非日常の空間の中で、超越的な存在の守りのもとに、人間性の燃焼を図る。それは、日常生活には考えられない、豪華さや活力に満ちている。これによって、日々の生活に新たな力を与える。まさに、文化力である。

文化庁の抜穴 河合隼雄

先日は、全国的に有名な岸和田の「だんじり祭」を観覧した。勇壮かつ美しい。外国からの多くの大使も感嘆の言葉を発していたが、これぞ、日本の祭と感じられる。

祭は下手をすると形骸化し、根本の精神が消え去るようなこともあるが、だんじり祭は実に生き生きとして、活力に満ちている。

大阪・泉州地域では、「祭」の国際サミットの計画もあるとか聞いているが、祭の力で世界中が元気になるとすばらしいと思う。

絶望の果て

文化庁の抜穴
河合隼雄

「絶望は死に至る病」と言った哲学者がいた。確かに何の望みもないという状況は大変である。心理療法をしていると、「この世に何の望みもない」という人が来られ、答えに窮するときがある。しかし、それにはよい答えがあることを先日発見した。

「のぞみはもうありません」と面と向かって言われ、私は絶句した。ところが、その人が言った。

「のぞみはありませんが、光はあります」

なんとすばらしい言葉だと私は感激した。このように言ってくださったのは、もちろん、新幹線の切符売場の駅員さんである。

「のぞみはなくとも、ひかりがある」
あまりにもいい言葉なので、私は思わず、言われたとおりのことを大声で繰り返して言ってしまった。

駅員さんは不思議そうな顔をしていたが、
「あつ、『こだま』が帰ってきた」
と言った。ハイ、オシマイ。

ミュージアムへ行こう

関西元気文化圏推進協議会と関西経済連合会の主催で、ミュージアムフォーラム二〇〇三が行われた。関西のミュージアム館長として活躍している、脇田修、蓑豊、端信行の皆さんに、建築家の安藤忠雄さんと私に加わって、「文化を楽しく遊ぶ、学ぶ、体験する」という主旨で話し合った。

ミュージアムに関するこのようなフォーラムを開催するのは画期的と思うが、うれしいのはNHK大阪放送局・大阪歴史博物館のアトリウ

文化庁の抜穴 河合隼雄

ムを埋め尽くすたくさんの聴衆があつたことだ。

フォーラムでは多くの人をミュージアムに引きつけるための、展示の方法、休館日の在り方、広報の工夫、などなどと次々アイデアが出された。それに、最近ミュージアムでさかんなってきた文化ボランティアについての話題もあつた。このようにしてミュージアムが活性化され、文化の拠点としての任務を果たすようになるのは、ほんとうにうれしいことである。

関西元気文化圏の事業の一つとして、文化庁主催で、関西各地において「国際文化フォーラム」を開催した。滋賀、大阪、兵庫、京都、奈良の各地で行い、公開のものやクローズドのもの、さまざまであった。これは大いに成功して、外国からの参加者も、ぜひ継続してやってほしいと希望する人が多かった。それらの詳細は他に譲るとして、ここに一つだけ気づいたことを書くと、各フォーラムの企画をそれぞれ個人にお任せするという方法をとったのが成功の一つの要因になったのではないか、ということである。

個人の力

文化庁の抜穴 河合隼雄

ある。
このようなとき、一般には委員会をつくって企画するが、下手をすると最大公約数的になってきたり、全体的意図が不明確になってしまふ。それに対して、個人の場合だと、その人が全責任を負い全力をふるって取り組むので、今回のように非常に特色のある、高い評価を受けるものとなったのだろう。もちろん、それに値する個人に依頼することが大切だが、個人のもつ力ということをあらためて感じたのであった。

生きている伝統文化

国立劇場おきなわの開場の行事に参加した機会に、八重山諸島のあちこちの見学に出かけた。その実感をひと言でいうと、伝統文化がいきいきと生きている、ということになるだろう。

伝統文化の重要性はだれもが認識しているところだが、下手をすると、それは床の間の飾り物のようになって、生活から遊離してしまう。お祭りも形骸化して、心が失われる。

石垣島、竹富島、小浜島、西表島と回り、島民の方々に案内していただいたり、説明をしていた

文化庁の抜穴 河合隼雄

だいたりしたが、それぞれの島における、島を挙げて、あるいは、村を挙げての「お祭り」の迫力が、よく伝わってくる。あるいは、懇親会に飛び出してくる隠し芸も、年季が入っていて、実にすばらしい。

竹富島の島民を挙げての伝統的建造物保存のみごとき。これは保存というより立派な活用である。建物が息づいている。

沖縄に国立劇場ができたのも当然のことだとつくづく感じた。

文化力アドバイザー

文化庁の抜穴 河合隼雄

関西元気文化圏の方策の一つとして、「文化力による元気なまちづくり」を提唱している。その支援のため、寺脇文化部長と私が「文化力アドバイザー」として関西の各地の要望に応えて出かけてゆくことになった。

これまでに、私は京都府の舞鶴市と和歌山県の貴志川町に行ったが、それぞれに大変すばらしいシンポジウムができてうれしかった。何よりうれしかったのは、各地において実践されているまちづくりの体験報告を聞くことができた

ことである。

舞鶴市は煉瓦づくりの建築物群を生かしたまちづくり、貴志川町は早くから「生涯学習の町」を宣言し、町中の人たちが取り組んできた町づくりなどの発表があった。高校生を交えてこれらの発表者が時間どおりに、豊富な内容を話されることに感心。学会のシンポジウムで平気で時間延長をする学者は、こういうところに生涯学習にくるべきだと思った。すばらしい試みなので今後も続けてゆきたい。

憧れのプリマドンナ

文化庁長官になったおかげで思いがけない恩恵を受けている。遠い観客席から憧れの目で舞台上に眺めていただけの、すばらしい芸術家や芸能人に直接お会いしたり、ときには対談まですることができ。私はなにしろ「人間」に関心が深いので、ほんの少し言葉を交わせるだけでもうれしいのである。そして、一芸に秀でた人はさすがだなと感心している。

もちろん、ミーハー的関心もあり、先日は憧れのプリマドンナ大谷洌子さんにお会いして、心がときめくのを覚えた。と言っても、若い人ならその人は

文化庁の抜穴 河合隼雄

誰というだろう。

実は終戦後、私が二〇歳のころ、藤原歌劇団に星のごとく登場したプリマドンナが大谷洌子さんなのだ。田舎出の青年が、生まれてはじめてオペラを観て、大谷洌子さんの声や姿に心をときめかせたのも当然である。

こんな昔話をしていたら、我が国オペラ界の重鎮の栗林義信さんが大谷洌子さんとの対面を調整して下さった。長官の役得も大したもので、ありがたいことである。

アニメの元祖

文化庁の抜穴 河合隼雄

日本のアニメは世界中に広がっている。どうして日本人はアニメが得意なのか、と外国人にたずねられると、「絵巻」の伝統があるからなどと答えていたが、最近アニメの元祖ともいうべきものを観た。

京都国立博物館の「京都・らくご博物館」という催しで、桂米朝門下の人たちの芸に「錦影絵」というのがあった。今から約二〇〇年前の江戸時代末期から伝わるもので、光源（当時は灯）の入った木箱に、絵が描かれたガラス板をはめ、その

投影した絵を写しながら語りをする。なかなか工夫がこらされていて、人が足を動かして踊ったり、雪がちらちら降ってきたり、けっこう「動き」が入る。

京都の伏見に残っていた装置を人間国宝の桂米朝師匠が譲り受け、弟子たちが技術を習得し、見事な上演となったわけである。

あまりに感心したので、来年のメディア芸術祭には特別出演をお願いし、外国の人たちに見ていただきたいと思った。

文化の香り

文化庁の抜穴 河合隼雄

文化庁は役所には違いないが、やはり文化の香りがしているべきである。と偉そうなことを考えたわけではないが、せっかく文化庁にいるのだから、何か文化的なことに触れる機会を多くもつのがいいだろうというので、そのような企画のひとつとして、先日文化庁の有志が集まって、香道の会をした。

香道の志野流家元、蜂谷宗玄宗匠にお願いして、重要文化財の旧岩崎邸の和室において、「お香の会」を開いていただいた。有志といっても

どのくらい集まるかと心配だったが、約五〇名の参加者があり、まずお家元から「香道」についての説明を受け、なれない手つきながら、一同真剣にお香を楽しむことができた。旧岩崎邸の保存に力をつくされた文化審議会委員の森まゆみさんも参加してくださいまして、会を盛り立ててくださった。

東京とは思えない静かなたたずまいの中で、ひたすら「香り」に精神を集中させる。まさに「文化の香り」のする体験であった。

コンステレーション

コンステレーションとは「星座」のことである。しかし、私の専門のユング心理学では、心の中の状況と外的に起こることがうまく合致して、全体として何かが星座のようにまとまることをコンステレーションと呼んで、大切に考えている。

あるコンサートで『星のセレナーデ』というフルートの曲を聴き、すばらしかったので、この曲やその他の星を主題とする曲も吹いて、それとともに、星にまつわるお話をいろいろとし

文化庁の抜穴 河合隼雄

て、「星をめぐるお話とコンサート」など企画してみたと思った。

その二日後、『ほたるの星』（菅原浩志監督作）という映画を見た。すばらしい映画で感動。この話は使えるなと思った。一週間後、神奈川県「よい本をひろめる会」で講演後、皆で歌を歌おうと言うと、『みあげてごらん夜の星を』を歌うことになった。この曲もいい曲だ。

私のまわりに上手に星をめぐるコンステレーションができつつあると感じたのである。

丸の内から文化力

文化庁は新築工事のため、丸の内のビル街の中に（四年間とのことだが）移転した。霞ヶ関とは異なる雰囲気の中で、「丸の内から文化力」を提案。どう受けとめられるかと心配したが、皆さんが大賛成で一挙に盛り上がり、大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会と文部科学省が協力して推進することになった。

さつそく、日本オーケストラ連盟や落語協会が協力してくださって、丸の内、クラシック音楽会や落語を気軽に楽しむことができた。映

文化庁の抜穴

河合隼雄

画の無料上映も行われた。

私も一役担うことになって、トークサロンとして、横浜F・マリノス監督の岡田武史さん、作家の井上ひさしさんと、それぞれ対談をした。岡田監督のチーム運用の話はビジネスマンにも通じるところが多くあるし、井上さんの軽妙な語り口は、笑いの中に文化の重要さを感じさせられたりして、多くの聴衆とともに、私も楽しく学ぶことができた。今後この運動を続けてゆきたい。

しつけと文化

文化庁の抜穴 河合隼雄

土、日曜日には長官の仕事を離れて臨床心理関係のことをすることがある。先日はスクールカウンセラーの研修会で「しつけることと育てること」という講演を依頼された。

この題目を見て私は少し驚いた。少し以前であれば、教師や親が「しつけ」に力を注ぎすぎて、子どもの自由に伸びる力を抑えるのを、カウンセラーはどうすればよいかを考えたものだ。ところが、今は適切な「しつけ」をすることがわからず困っている教師や親が多いので、カウンセ

ラーが「しつけ」のことも考えねばならなくなったのだ。

日本にはかつては家や世間を規範とする、しつけがあった。しかし、今、個人の自由を大切にする上での「しつけ」がわからないのだ。欧米では自立した人間をつくるための子どもへのしつけは日本よりよほど厳しい。このあたりのことをよく考えてしつけをしないと、単なる昔返りになる。私はしつけの話をしつつ、ここにも文化の問題がかかわっているなど感じたのである。

シューベルトの「父親殺し」

題を見てギョッとされたかもしれぬが、シューベルトは一四歳のときに「父親殺し」という歌曲をつくっている。丹波の森国際音楽祭シューベルティアーデの一〇周年記念に参加したが、総合プロデューサーでテノール歌手の畑儀文さんが、この曲を歌われた。

人間は青年期になると、心の内界において「母親殺し」「父親殺し」を象徴的に成し遂げて自立してゆく。その後に依存の対象ではなく、一人の人間として父や母を見ることができるようになっ

文化庁の抜穴 河合隼雄

て、あらたに尊敬の気持ちが生じてくる。この間に親子の間でいろいろと葛藤が生じるがそれが克服されてゆく。

シューベルトはさすがに天才でこの経過が早く、「父親殺し」の三年後に「父の命名日のために」祝いの曲を作曲している（これも当日歌われた。美しい曲である）。

東京の一極集中を排し、日本の各地で文化的な催しのあるのを歓迎している。丹波の森でこんな音楽祭が一〇年も続いている。すばらしいことだ。

読書の功罪

文化庁の抜穴 河合隼雄

岡山県にすばらしい県立図書館が開館。記念講演をしたが、そのときになかなか興味深い質問を受けた。猿にしる鳥にしる「読書」などしないが、上手に育児をやっている。それに反して、よく読書している人間は、最近など特に下手な育児をする人が多い。このことをどう考えるかと言うのである。

私は一応次のようにお答えした。人間は他の動物と異なり、文明を手に入れた。このために動物とは比較にならない便利で快適な生

活を送っている。しかし、これは人間が「自然」に反して生きていることを意味する。その点、動物は自然のままに生きているので、育児などはうまくゆくだろう。人間は「自然に反する」道を歩み出した限り、「読書」も大切になってくるのだが、やはり、どこかは「自然」に学ぶことも必要で、そのときは書物からの知識は有害になるかもしれぬ。読書は大切だが、その功罪についての認識も必要である。皆さんどう考えますか。

丸の内で読書

文化庁の抜穴 河合隼雄

「丸の内から文化力」の企画の一つとして、読書週間にちなんで、ビジネス街で働く人たちにも読書してもらおうと、「丸の内読書会」を企画。朝日新聞社の後援で、作家の川上弘美さんと私で一〇冊の本を選び、そのうちのどれかを選んで持ってきて、ともかく一同で本を読もうという試みである。

会場に、「相田みつを美術館」を提供していただいたのは非常に有難かった。相田みつをさんの短い、しかし多くを考えさせる書の陳列に

囲まれ、それぞれが好きな場所で本を読むのだ。まさに読書にふさわしい場である。

約六〇名の方が参加され、最後はそれぞれ同じ本を読んだグループに分かれ話し合ってもらった。それまでの読書中の真剣な顔が急にほぐれ、初対面とは思えない親しみのある雰囲気の中で会話がはずむ。これに川上弘美さんも私も加わって、秋の夜長の読書談議はどこまで続かわからぬほどの感じであった。全国各地でこのような催しをされてはどうであろう。

紙芝居

文化庁の抜穴 河合隼雄

仙台で「紙芝居」を保存する活動をしている人にお会いした。「実演」もあって、なつかしく楽しかった。子どもころに、自分も大きくなったら紙芝居屋さんになりたい、と思ったことを思い出した。

テレビの画面と違って、語り手の人間味が直接に伝わってくるところに、何とも言えぬよさを感ずる。今、絵本の読み聞かせがだいぶ盛んになってきてうれしく思っているが、このような人たちは、もう一つ踏み出して、紙芝居をつくっ

てみてはどうだろうか。ずいぶん楽しいことと思う。

私は箱庭療法というのを日本ではじめ、それは大いに発展した。箱庭の作品をスライドにし、それを映写しながら箱庭療法の講義をするのだが、世界各国から来てほしいと言われている。講義をしながら、これはまるで紙芝居だなど思い、子ども時代の夢が達成されたかなと思う。文化庁をやめたら、「国際紙芝居屋」になって、世界のあちこち回ってみたいな、と思ったりしている。

あらたな気持ちで

文化庁の抜穴 河合隼雄

三年の任期が終わり、これで放免される
と思っていたが、長官の仕事を続けること
になった。就任以来「文化で、日本を元氣
に」という標語のもとに頑張ってきた、だい
ぶ効果が見えてうれしく思っていた。それを
もう一押しせよ、というわけである。

こんなときに、三年間うまくやってきたの
で、この調子で続けてやろうと安易に考え
ていると、必ず失敗するものだ。過去のこ
とは忘れて、一から出発し直すほどの気持

ちで臨むことが必要だと思う。

自分の決意をあらたにし、それを文化庁
の皆様にもともしていただこうと、文化庁
の職員全員とパーティを開いた。パーティ
は実に楽しかったが、ここで文化庁の全員
があらたな気持ちをもって、「文化で、日本
を元氣に」しようと思をひきしめたことは、
大きい意義があったと思う。このような気
持ちで努力しますので、皆様方もどうぞよ
ろしく願います。

「狂」の美

文化庁の抜穴 河合隼雄

「狂」とか「狂気」などというマイナスのイメージばかり浮かぶようだが、話はそれほど単純ではない。狂を通常ではない人間の心の在り方と考えると、それは極限としての美の世界に接近することにもなるのだ。

そのような極限の美の表現、しかもまったく異なる様式のもの、を、相ついで鑑賞することができた。ひとつは、ジョン・ノイマイヤー監督の率いる「ハンブルク・バレエ団」によるバレエ『ニジンスキー』。もうひとつはその

二日後に見た、国立能楽堂公演の、喜多流の能『高野物狂』。いずれも男性の狂の世界が生み出すこの世ならぬ美の世界を追究したものであるが、前者は美の炸裂とでも呼びたいものであるのに対し、後者は抑えに抑えた表現を通じて、観客の全身に狂の美を伝えてくる。いずれも深い感動を呼び起こすものである。

それにしてもこれほど異なる超一流の芸に短時日に接しられるのは、日本に住んでいるおかげだなあ、と思う。

文化庁に勤めているのだから、少しは文化のことに触れようと、職員に対していろいろ研修やワークショップを行ってきたが、今回は、講談の旭堂小南陵先生をお招きした。講談の歴史、その特徴などについて教えてくださったが、講談が生まれてきた元ともいえる「節談説経」の実演を聞かせていただいたのが大変ありがたかった。

おそらく、昔にお坊さんが説教を興味深くするために考え出したものと思うが、聴いてい

節談説経

文化庁の抜穴

河合隼雄

と確かに仏法を説きつつ、講談はもちろん、落語や浪曲などの元になったのではないかと思えるようなところが興味深かった。今、この芸を語れる方は日本にもあまりいないことだろうし、貴重な体験をさせていただいた。旭堂小南陵先生ありがとうございました。

小南陵先生のおだてに乗って、私や寺脇文化部長、西阪芸術文化課長が、高座に座って「実演」？をしたが、この結果については割愛しておく方がよさそうである。

懐にとびこむ

第二回文化庁文化交流使活動報告会が行われた。日本文化を伝えようと、世界の各地で活躍された交流使の報告は、多彩で興味深く、いずれもすばらしかったが、ここではそのなかの一つだけを紹介しよう。

浪曲師の国本武春さんはアメリカのテネシー州に行かれた。正直のところ、私はアメリカ人に浪曲などわかるのかな、と心配であった。

ところが、なんと国本さんは、渡米の翌日から、あちこちのバンドの一員となり、三味線

文化庁の抜穴

河合隼雄

駆使して協演したと言うのだ。これには、アメリカ人もあつとびつくり、すぐに親しみを感じて、その後に、三味線について、浪曲について関心をもちはじめ、国本さんはワークショップなどによって、アメリカ人の理解を深めたという。

まず、相手の懐にとびこむ。親しみが湧いてきたところでおもむろに、自国の文化を紹介してゆく。文化交流使の一つの真髄を見る思いがした。

国際化時代の研修

ある有名企業から研修の助言者として依頼された。研修といっても講義をして帰ってくるだけではあまり意味がないのでお断りすることが多い。ところが、これはまったく異なり、朝一〇時から午後四時まで、私の著書をもとにグループごとに研修したことを発表し、それに企業の幹部がからんでコメントし、バトルを展開。それに私も加わって欲しいと言っているのである。

そんなことならと意気込んで参加したが、確かにその甲斐があった。私が日本の神話をべー

文化庁の抜穴 河合隼雄

スにして、日本の「中空均衡型」と欧米の「中心統合型」と比較して論じていることがテーマになるが、感心したのはありきたりの学説の紹介などでなく、「この考えでゆくと我が社は」とか、「欧米人と交渉したり協調したりするとき」とか、きわめて具体的な考えが述べられ、それに対して幹部の人は容赦なく突っ込みを入れる。国際化の時代。企業もこのように文化差の問題を考え、厳しい研修を積むのだ、と大いに感心した。

異文化コミュニケーション

平田オリザ／金明和作、李炳焄／平田オリザ演出『その河をこえて、五月』という演劇を新国立劇場で観た。

作者、演出家、俳優すべて日韓合同で演劇などできるものかと思う人が多いだろうが、これは実に見事に成功している。異文化コミュニケーションという、異なる国民のことを考えるだろうが、世代の差、男女差、職業の差は時に国の差を超えるほどの「異文化」状況にある。そのことをこの劇は巧みにわからせて

文化庁の抜穴 河合隼雄

くれる。実に多様な異文化コミュニケーションが織りなして生み出す悲喜劇に、泣いたり笑ったりしながら、じゃあ、いったい自分は何者なのだろう、という本質的な問いかけに観客の一人ひとりが直面させられる。

異文化コミュニケーションの困難さを、あらためて実感させられながら、このような演劇を成功させたという事実が、観客のわれわれに、異文化コミュニケーションに努力してゆこうという勇気と希望を与えてくれるのである。

滋賀県の「子どもの美術教育をサポートする会」の活動を見学に行った。この会は早くからボランティア活動に取り組み、学校と連携して子どもの美術教育——というよりもっと広くいろいろな体験学習——をすすめているすばらしい会である。

今回は、「古民家」と言っ、日本の古い民家を再建。その周囲も田や小川や里山など、日本の一昔前の状態を再現したところで、子どもたちは自由に体験学習をしていた。

なつかしい

文化庁の抜穴 河合隼雄

興味深かったのは、子どもたちがこの場に来たとき、「なつかしい」というのが多いとのことだった。柳生博さんも同様のことを語っておられるが、子どもたちがはじめて体験したことについて「なつかしい」と言うのは不思議だが、わかる気がする。

「なつかしい」は英語で表現するのが難しい感情である。日本文化の根底にあるものを解き明かしてゆく上で、「なつかしい」はひとつの重要な鍵となる言葉ではないかと思った。

博物館・美術館と子ども

子どもたちにとって、一般の博物館・美術館は縁のないところであり、たとい、訪れたとしても退屈なところ、としてしか印象に残っていない。というのがこれまで実状だったのでなかろうか。

九州国立博物館が一〇月にオープンするが、その前景気ということもあって、九州地区の文化芸術懇談会を同博物館で開かせていただいた。たくさんの参加者で、そこに地元の国立博物館の発展を盛り立てようとする熱意を感じ

文化庁の抜穴

河合隼雄

られて非常にうれしかった。

もうひとつうれしかったのは、この博物館が子どもの教育に強い関心をもち、そのための企画をいろいろと考えておられるのを知ったことである。ワークショップに参加し、子どもたちが楽しんで学ぶことができる。三輪嘉六館長の提唱される「学校よりも面白く、教科書よりわかりやすい」教育がぜひ実現され、そのような運動の輪が、全国の博物館・美術館に広がるといいな、と期待している。

韓国の高校生と共演

文化庁の主催する文化芸術懇談会を全国各地で開催し、私はそれによってその土地の人々と意見交換をしたり、伝統芸能を鑑賞させていただいたりしている。

七月末には青森で開催したが、今度は高校生たちとともにすることにした。と言うのは、折しも全国高等学校総合文化祭が開かれているので、それと兼ね合わせてすることで、いろいろ便宜がはかれると考えたからである。

青森明の星高等学校で行ったが、高総文祭

文化庁の抜穴

河合隼雄

に海外から参加している韓国の学生さんたちも、文化について発表され、それに韓国の高校生のフルートを吹く方と私が共演できたことが何よりもうれしいことであった。

デュエットで「アリラン」を演奏。それにアンコールには、青森明の星高等学校の弦楽合奏団に私も韓国の高校生とともに加わって演奏した。まさに「日韓友情年」にふさわしいことで、出演者も聴衆も心がつながり、ほんとうにすばらしい時を過ごすことができた。

存在の源

文化庁の抜穴 河合隼雄

非常に興味深い公演を観た。「舞踏の源流 文楽」と題して、日本の伝統芸能である文楽と、国際的に評価されている日本の現代の「舞踏」とのコラボレーションが、九月二十六日、東京ミュージックカレッジのライブホールにおいて行われた。

すべての演目が興味深かったが、特に感心したのは、文楽の人形遣いの人たちが人形なしで舞台上で演技する場面であった。三人の人形遣いが人形を持たずに、人形を演技させ

ているように動く。見てみると何だか現代舞踊を見ているようにさえ感じる。

「おどり」は体のみではなく心もおどるし、人間の生命力の源である。こんな公演を見ると、人間は人生劇場で演技しているつもりでも、ほんとうは普通は目に見えない深いはたらきによって、その存在を支えられているのではないかと思う。まさに人間存在の源に触れる感じで深く感動した。このような公演をぜひ外国でもしていただきたいものである。

今年の国民文化祭は福井で行われた。オーブニングのパレードや式典などを観覧し、その素晴らしさに心を打たれた。日本の各地域の持つ文化力にはほんとうに感心させられる。

その翌日、皇太子殿下のお供をして、松岡町で行われる人形劇を見た。福井らしく恐竜を主人公にしたお芝居だが、実にうまくつくられていて、何よりも嬉しいのは、観客の子どもも大人も劇の進行に従って一喜一憂、舞台と観客が一体となつての公演であることだ。子どもたちは生き

人形劇

文化庁の抜穴 河合隼雄

生きと反応している。

実は私は大学を卒業して、中学・高校併設の学校の数学教師になったとき、中学生と人形劇クラブを設立。人形劇や影絵などをしたことがあるので、昔を思い出して懐しく、感激もひとしおであった。

皇太子殿下も楽しそうで、劇の後には子どもたちの中に入って指人形を使いながら話しまれりたり、心なごむ光景であった。まさに「地域から文化で日本を元気に」そのものであった。

海に返す

文化庁の抜穴 河合隼雄

中村吉右衛門がペンネーム松貫四の名で書き下ろし、自ら演じた『日向嶋景清』を観た。迫力に満ちたすばらしい公演であった。

平家滅亡後の景清は頼朝の誘いも拒否、武将の誇りと威厳を保ちつつ、主君の重盛の位牌を守り、孤島に暮らしている。

ここに彼の娘が訪ねて来るが、武将の誇りを保つためそれをさえ拒否してしまう。後に紆余曲折があり、最後に彼も娘のために我を棄てて船に乗って鎌倉へと向かう。

その場面で、景清が重盛の位牌を海中に投じる。私にとってはこれがたいへん印象的だった。これは、彼が棄てたのではなく、海にお返ししたのだと思う。

海は広大である。その自然の在り様の前では、人間の敵・味方という判断、誇りと恥辱などのすべての分別は消え去ってしまう。

人間は時にすべてのことを海に返しておまかせすることが必要なだろう。私はこのような作品をぜひ海外でも公演していただきたいと思った。

米長会長との対局

文化庁の抜穴
河合隼雄

文化庁では、庁の職員が文化的なことを理解しなくては、というので文化に関するいろいろなワークショップを行い有志が参加している。先日は、そのひとつとして日本将棋連盟を有志約四〇名がお訪ねした。

まったく初心者も参加したので、それには将棋についてのお話があり、少しでも経験のある者は、棋士の方々と対局していただいた。今話題の瀬川四段と対局できた者もいるが、私は何と連盟会長の米長邦雄さんに

対局していただくことになった。そして、結果は、私の勝！

どうしてそうなるか、会長は何も言葉で指導も助言もされない。しかし、会長の手に乗っていると知らぬ間に勝つようになっていく。これは負け方の名人と思ったが、すぐ考えたのは私の本職のカウンセリングである。カウンセラーの受け応えも米長会長の指し手のようにうまくやっていると、相手が勝つ、つまり自然に治るのではないかと思った。

韓国の国立中央博物館

韓国の国立中央博物館が昨年の一〇月に開館したとき、お招きを受けたのに、所用のために出席できず気になっていた。それに当方の九州国立博物館開館のときは、韓国の国立中央博物館長や文化財庁長官が出席してくださり、九博の展示物についてもいろいろ配慮してくださったりしたので、なおさら、ぜひ一度お訪ねしたいと思っていた。

今回の訪韓でそれが実現できてうれしかった。展示室部分は三階建、展示面積二万七〇九〇㎡

文化庁の抜穴 河合隼雄

の堂々たる建築物。それに周囲は公園といつていいほどの広い快適な空間に囲まれている。博物館・美術館に市場化テストをなどと騒いでいる国にとっては見習うべきすばらしさである。

感心することは多かったがそのうちの二点。来場者が極めて多く、わざわざ子どもミュージアムが併設されていることもあり、たくさんの子どもが来ていること、および日本室がつくられていることである。今後、日本の博物館と大いに交流したいと思った。

重要文化的景観

文化庁の抜穴 河合隼雄

とする態度の表れとして、非常にうれしいことである。

市長をはじめ住民代表の皆様とお話合いをして、何につけても開発優先のような風潮の中で、努力を重ねてこの景観を守ってこられたご苦労の程を知り、頭の下がる思いがした。相対的な対立や葛藤を乗り越えてこそ、今日のすばらしい景観がある、と敬意を表したいと思う。今後、文化的景観を考える人たちにとって、大いに参考となる話であった。

文化的景観が文化財として位置づけられ、特に重要なものを重要文化的景観として選定できるとなった。その第一号に「近江八幡の水郷」（滋賀県近江八幡市）が選定され、去る二月一三日に選定通知書を、川端五兵衛・近江八幡市長および地域住民代表の方々にお渡しした。

このように文化的景観を国としても重要視することになったのは、我が国の文化ということとをより広い視野から捉え、大切にしていこう

九州・沖縄から文化力

去る三月一八日に、国立劇場おきなわにおいて、文化庁主催「伝統文化の祭典 人間国宝 九州沖縄」が開催され、私も文化庁の人たちとともに参加してきた。

秋篠宮殿下と眞子内親王殿下のご臨席を仰ぎ、九州・沖縄の人間国宝九名、全員のご出場によって、華やかで意義のある「祭典」を挙行することができた。沖縄の組踊をはじめ芸能の披露があり、工芸技術関係の方々もそれぞれの立場から、「芸談」をしていただき、実に感銘深い催し

文化庁の抜穴 河合隼雄

になった。

このときに、私は「文化で日本を元気に」の標語に加えて、文化の東京の一極集中を廃し、日本の各地域の文化力を発揮して日本を元気にしたいという考えから、「九州・沖縄から文化力」ということを提唱した。関西元氣文化圏の構想がうまく機能していることや、沖縄の「国立劇場おきなわ」、九州の「九州国立博物館」の設立を契機として考えたが、地元の人たちに受け入れられ発展するのを期待している。

国会議員と映画

国会議員の「映画を観て語る会」が超党派で発足した。代表世話人は河村建夫先生（自民党）、鳩山由紀夫先生（民主党）、事務局長は松井孝治先生（民主党）である。

私はかねがねからハリウッド映画のなんだかお金と物の力を見せつけるようなのが世界中に勢力を振るうのがあまり好きではなく、日本映画はすばらしい伝統をもっているし、ぜひがんばってほしいと願っていた。この会に集まられた国会議員の先生方も同じ思いなのだろうと思う。

文化庁の抜穴

河合隼雄

しかし、「日本映画」に限定せず、まず映画を観ようというところが度量の広いところである。大喜びで私も参加させていただいたら「最高顧問」といわれて、冷や汗もの。それでもこのようにして文化の大切さをいろいろな角度から味わってゆこうとする国会議員の方々が超党派で集まられるのは本当にうれしいので、私も少しでもお役に立てばとお引受けすることにした。国会議員の方々が超党派で映画の感想を述べ合われるのに参加できるのは、楽しくありがたいことである。

クロアチアの世界遺産

文化庁の抜穴 河合隼雄

クロアチアは、ワールドカップ・サッカーの日本の対戦国として、日本人の関心を引きつつあるようだ。今年のGWに私はクロアチアを訪問し、いろいろと興味深い経験をしたが、今回はクロアチアの文化財、特に世界遺産について非常に印象が深かったので、それについて述べてみよう。

クロアチアの世界遺産の中で、特に有名な中世の都市ドゥブロヴニクを訪ねた。まったく中世そのままの都市で、その道を歩いているだけで往時がしのばれる情緒豊かな町である。最近の内

戦で相当に破壊されたが、市民たちの努力でみごとに修復されている。

プリトヴィツェ湖群国立公園は、私は世界中いろいろな名勝を見ているが、これほどスケールの大きさと繊細さを共有しているところは少ないと思った。

どちらもクロアチアの人々のこれら世界遺産を愛し誇りにしている気持ちが伝わってきて、深く印象づけられた。日本からの観光客も増えることだろう。

ボランティア芝居

文化庁の抜穴 河合隼雄

文化庁の主催する文化芸術懇談会で長崎県に行った際に、長崎歴史文化博物館を見学した。建築家・黒川紀章氏の設計になるものだが、そこに江戸時代の長崎奉行所が復元されている。現代建築と江戸時代の建築物が共存する興味深い建物だが、そのときに印象に残ったことを一つ。

奉行所での取調べの様子を過去の判決記録（犯科帳）に基づきながら、ボランティアがお芝居して上演する。これが実に好評で非常にた

くさんの観客が来る。観客をうまく参加させるようなシナリオもあって、ますます大評判のことである。

このようなボランティア活動は、前々からどこかでやってほしいと私が願っていたことである。日本の歴史を、古い遺物だけで知るのではなく、生きた人間の姿をとおして感じることは本当に興味深いと思う。こういうところに興味深い文化ボランティアの活動があり、全国でそれぞれ工夫してやっていたらいいと思う。

舞台芸術特区

規制緩和によって、日本中にいろいろな特区ができたのは、周知のとおりである。

ところで、「舞台芸術特区」があるのをご存じだろうか。教育特区は知っているが……ということになるだろう。実は偉そうに言っている私も、こんな特区のあることを知らなかった。

それは富山県南砺市利賀村上百瀬地区である、と言うと演劇通の方は「そうか」とうなずかれるだろう。鈴木忠志さんという国際評価の高い演出家が、ここに劇場や研修所を建て、

文化庁の抜穴

河合隼雄

世界の演劇人が集ってくる、というわけである。私は行って舞台を見せていただき感激したのだが、今回強調したいのは次の一点である。

マスメディアにはいろいろ特区の話題が報道されるが、これは芸術文化に関する全国唯一の特区であるのに、どこにも報道されなかったのが私は残念なのである。マスメディアの方に、どうか芸術文化にも目配りを願いたい。